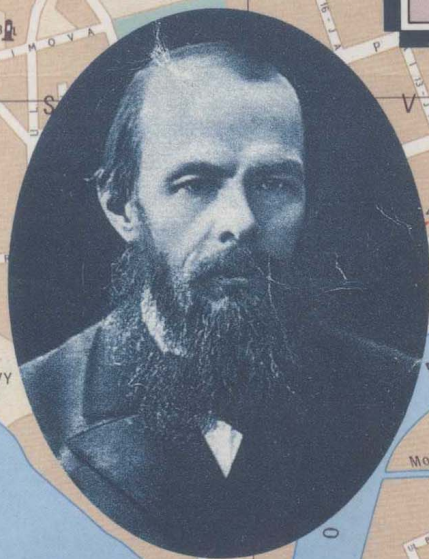


武蔵野書房

白川正芳

ドストエフスキイへの旅



ドストエフスキイ

著者紹介

白川正芳（しらかわ まさよし） 評論家，作家

昭和12年，福岡県生まれ。慶大中退。文芸批評の他，社会，囲碁評論，創作でも活躍。「埴谷雄高論」（冬樹社）を最初に出した文芸評論家で，他の主著に「吉本隆明論」（永井出版企画），「現代文学の思想」（冬樹社），「不可視の文学」（潮出版社），「稲垣足穂」（冬樹社），「立原正秋」（龍門出版社），「黙示の時代」（河出書房新社），「超時間文学論」（洋泉社），「昭和文学を語る」（第三文明社）など。囲碁の著書に「碁は断にあり」（三一書房），「碁に勝てなければ他のことにも勝てない」（三一書房），「囲碁の実践的研究」（三一書房）があり，「ちいさな王国」「光明寺の門」などの小説もある。

昭和56年，ソビエト作家同盟の招きで訪ソ，モスクワ，レニングラード，カザン，タシケント等を旅行した。囲碁六段で，昭和60年，文壇本因坊位に就く。60年と62年，63年，平成2年に，日本文化界囲碁代表団の一員として訪中，北京，上海，成都，福州，南京，揚州を旅行し，各地で中日囲碁交流の対局をおこない，日中親善にも尽力。平成元年には第四十四期本因坊戦第一局取材のためスペインへ赴き，その観戦記を執筆した。

ドストエフスキイへの旅

一九九一年三月二四日 初版第一刷発行

著者——白川正芳

小金井市前原町三一七—一五／郵便番号一八四

発行者——福田信夫

発行所——武蔵野書房

国分寺市本多二一九—八

電話〇四二三—二六〇二〇（代表）／郵便番号一八五

FAX〇四二三—二五—八八六二

郵便振替・東京八—九二—二九

印刷／ミツワ印刷 製本／松栄堂製本

装幀／エディトリアルデザイン研究所

不良本は送料小社負担でお取り換えいたします。

定価二、九八七円（本体価格二、九〇〇円、

税八七円、送料小社負担）

ド
ス
ト
エ
フ
ス
キ
イ
へ
の
旅

〈目次〉

I 昭和文学の回顧

- 一、日に日に新たななり——川端康成と吳清源——……………6
 二、昭和文学の回顧……………63

II ドストエフスキイと埴谷雄高

- 一、ドストエフスキイと埴谷雄高……………80
 二、観念の世界による創造——埴谷雄高『死霊』——……………107
 三、ドストエフスキイと小林秀雄……………120
 ——『ドストエフスキイの生活』——……………
 四、二十世紀の新しい文化・映画——埴谷雄高『映画論集』——……………133
 五、昭和のディレッタント——竹内好——……………161
 六、文人と自然思想——保田與重郎——……………170

七、	江戸前文学の魅力——石川淳追悼——	174
八、	雅に入り、俗にも入る——石川淳——	177
九、	人はみな「旅」のなかにあり——立原正秋——	180
一〇、	この世を生きるのも一つの旅か——立原正秋——	184
一一、	椎名麟三『永遠なる序章』『懲役人の告発』	198
一二、	私と芭蕉	208
一三、	ここに薔薇一束——「朱羅」の十八年——	211
一四、	同人誌事情	234
一五、	日本人の敬語	239
一六、	母の五十回忌	244
Ⅲ	ドストエフスキイへの旅——ソ連紀行——	
一、	ソ連初旅日記	248
(一)	人生の休暇の時	248
(二)	「ドーブルイウードウ」	258
(三)	ドストエフスキイの生家	266

(四) ネクラソフの子孫	276
(五) タタールの文学者と	285
(六) チェーホフの家	294
(七) チェーホフの家(続)	304
(八) ドストエフスキイ博物館	314
(九) ネバ河	319
(十) レニングラード作家同盟で	324
二、タシケントの一日	331
三、サマルカンドの廟群	339
四、夕陽に輝く天山山脈	342
五、レーニンの丘	345
六、デンマーク製のカンビール	347
あとがき	352
初出一覧	355

I

昭和文学の回顧

一、日に日に新たななり

——川端康成と呉清源——

一

数年前、日本棋院の一階にあるレストランの和室で篠原正美九段から本因坊秀哉名人にまつわる話を二つ聞いたことがある。私は、「重タンク」の異名で強腕を謳われた日本棋院の重鎮であった

篠原九段とは同郷のよしみで、会えば話をするし、たまに碁を見てもらったりしていた。

一つは、昭和十二年十二月に、秀哉名人の最後になった指導碁の相手をしたという話である。本因坊秀哉名人が名人引退碁を打ったのは昭和十三年である。この名人引退碁の観戦記を川端康成が新聞に執筆したのが小説「名人」を書くきっかけになったのだが、引退碁を打つ前に指導碁の最後もあつたらしいのである。いかにもむかしの人らしい律儀さである。今とちがって、当時は、名人となるとその公式対局はきわめて数すくないが、これは、指導碁も同じだったらしい。

「秀哉名人の最後の指導碁が私にまわってきたんですよ」と篠原正美九段はいった。二子番——つ

まり二子のハンディをつけて打つ指導碁を十三時間かけて打ったという。氏はこのとき二段である。

「三目残ってほっとしました」

氏はそのときの「ほっとした」表情を蘇らせるような笑顔になっていた。新進気鋭の二段に二子置かれては、秀哉名人といえども容易ではなかっただろう。

「三子であぶなかったこともありましたよ」

これは別の日の話である。場所はやはり日本棋院一階のレストランだった。日本棋院で偶然会った九段に、私が江崎誠致氏と打った文壇本因坊戦の決勝の碁を見てもらい、雑談した折りだった。

「一番勝負なら、プロ同士が打っても三子まではわからない」

石田芳夫九段からかつてそう聞いたことがあったので、その話を思い出してした。すると篠原九段は、秀哉名人に三子を置いて打った碁が勝敗不明のところまでいき、あぶなかったことがあった話をしてくれた。

「秀哉名人は手を変えてきました」

序盤の定石で、普通に打ったのでは妙味に乏しいから定石を変化してきたのである。私が差し出した原稿用紙に図を書いて説明してくれた。五十数年前の対局でも記憶にあるのに感心した。

「秀哉名人は小柄でしたが、威厳が備わっていましたね。秀哉名人を知る人もだんだん少なくなってきました」

篠原九段は秀哉名人の話になると自然に顔がほころんだ。

むかしから「二子局は碁にあらざ」といわれ、二子置けば、黒が勿論、絶対有利なのだが、一番勝負となると、そこに人間と人間との「勝負」の要素が入ってきて、プロ同士といえども、必ず勝るとはいきれないものがあるらしい。

秀哉名人引退のあと、昭和囲碁史に燦然と輝いている天才吳清源九段も、来日して間もない頃、秀哉名人に三子を置いて打ち、あぶなかったことがあるくらいである。

吳清源九段が北京から日本へ来たのは昭和三年、数えて十五歳のときだった。当時の「朝日新聞」を調べてみると、昭和三年十月二十日付の夕刊に「支那の天才棋士 吳清源少年来る」の見出しで次のように報道されている。

「僅十五歳の少年の身で三段の実力を具え天才棋士として名高い支那の吳清源少年は日本棋院の勧誘を受けいよいよ十八日吉沢公使と長安丸に同船して支那を出発し二十二日神戸上陸、二十六日入京するはずである。同少年は北京にあって定まった師匠にもつかず独力で碁経を研究し支那棋界の顧恩浩三段始め諸豪を破り今夏は橋本四段と先々先で対局し二番とも勝ったという底知れぬ力を有しているので、日本棋院幹部がその才を惜しんで大倉棋院副総裁の援助により吉沢公使の斡旋で母や兄同伴来朝することになったもので入京の上は日本棋院に入って精進し来春の大手合せから出場するそうである」

これに先立ち、すこし前に写真入りでこんな記事が出ている。

「噂の高い少年天才棋士呉清源君がいよいよ十月上旬日本へ来ることになった」とあって、

「呉少年はことし十五歳、今全盛を極める日本の棋界に於てさえかくの如き天才児は見出せない。

其棋品は棋聖秀策の再来と驚嘆されている。初め日本棋院では屢々呉少年に來遊を勧め、本人も頻りに希望していたが、彼の母は『現在の支那は未だ日本のように碁を以て身を立てることができない。且つ呉少年は病弱であるから将来を考えて手許で教育したい』とて愛児を一人異国へ手放し兼ねる慈母の情を訴えて断ってきたが、本因坊名人を初め岩佐、瀬越各七段の棋院幹部は此の少年を空しく埋もれさせるに忍びず、大倉喜八郎棋院副総裁の援助により今春以来吉沢公使を煩わした結果、母と兄も同伴日本留学と決まったのでいよいよ一家北京から東京に移って棋道に精進することとなった。呉少年の実力は、優に三段を具えているが、定まった師に就いたことはなく、日本で発行された碁経は悉く涉猟して蘊蓄を極めたものである」

一昨年岩本六段と二子で打ち分け、今春劉昌華三段に互先白番にて十三目勝ち、橋本四段に対しては先々先で黒番二番とも勝ちという冴えを見せている、と最近の成績を伝えている。これはまさに驚くべき戦績であり、当時如何に驚異の眼で見られていたかがよく分かる記事である。

来日してまず問題になったのは、日本棋院が呉清源を何段に格付けするかであった。タイトル戦が主流で多様な棋戦がさかんな今とちがい、当時、段位は絶対的な權威をもっていた。呉清源の師瀬越憲作は、三段位はあるだろう、との見解だった。公平にみても、新聞で報道された実績からは三段はあるとみられる。これに対し、いや初段くらいだろうという人もいた。そこで、一応三段格

ということにし、正式の段位認定のための試験碁を打つことになった。

このとき最初に相手をしたのが、冒頭で私に秀哉名人の話をしてくれた篠原正美九段だった。篠原九段は当時四段、春の大手合いで優勝していたから試験碁の相手としてはふさわしかった。この碁は、試験碁であるにもかかわらず、初の国際試合の様相を呈し、双方の緊張は極度に達した。時間は無制限で打たれ、三日かかった。篠原正美九段の奮闘にもかかわらず、結果は呉清源九段の中押し勝ちに終わり、その実力を示した。

第一関門を無事通過した呉清源が次に対局したのは秀哉名人との二子局であった。この碁がいわば本試験にあたるものであった。これをもっても、当時、いきなり三段に格付けするのがいかに權威あるものであったかがわかる。「負けたらどうしよう」と呉九段の母や兄は随分心配したらしい。呉九段は後にこう回想している。

「秀哉名人は、たいへん小柄な人で、体重も三十五キロに欠けるほどであったが、盤の前にびたりと座ると、他の棋士よりもひと回りも大きく見えた。篠原四段のときと同じく棋院の婦人室で対局したが、その日は、瀬越先生の代わりに橋本さんが棋院に詰めて、成り行きを見守ってくれた。この対局は、『負けたらどうしよう』と、兄も母もずいぶん心配したらしい。私は来日早々だから、日本の棋士のように、名人の權威がもたらす圧迫感にもそれほど捉われずに、平静な気持ちで打つことができた。(中略)碁は私の四目勝ちに終わったが、自分でもたいへん良く打てたと納得できる内容で、『黒の態度莊重堅実を極め、よく最後まで優勢を持続し、歩武堂々、逆に白をして乗ずる

隙を与えざりしは、二子局として快心の傑作なり』という名人の講評を頂いたのである」(吳清源著『以文会友』)

この碁に勝って吳清源は日本棋院から晴れて三段を許され、日本での専門棋士としての生活が始まった。飛付き三段を許されたのは破格のことであり、「囲碁クラブ」昭和十七年九月号に掲載された「吳清源九段略年譜」には「けだし一躍三段を獲得せる棋士は古来稀なり」と記されている。「名人の権威がもたらす圧迫感」について触れられているが、当時の名人は、現在では想像もできないほどの権威と威厳があった。権威を裏付ける実績もあったのである。しかし、来日早々の吳清源はこの頃から、たとえ相手が名人であっても盤上だけの勝負に熱中するという呼吸をすでに身につけていたらしい。彼の並外れた集中力は、素晴らしい成績となって現われ、その後、天才の名をほしきままにするのである。いかに集中できるかが勝負師の第一の条件であるのは今もむかしも同じである。

だが、吳清源にして、なお、名人の権威、貫禄に圧倒された、こんな話を書いている。正式に三段を許された直後、時事新報社が正月用に企画した対局で、再び秀哉名人と打つことになった。対局当日、二子のつもりで黒石を二つ置いたところ、名人は「三子」とただ一言、表情も変えずにい放ったという。

「私はこの一言に気押されて着手が伸びず、徐々に紛れて、三日目には勝敗不明に近い局面になってしまった。最後は全部の石を盗いで十一目勝を取めたものの、瀬越先生には、二日目の打掛けの

ときに『三子局に負けるようだったら、国に帰れ』と叱られるし、冷汗ものだった」(『以文会友』)
 私は、この件りを読みながら、篠原九段が秀哉名人との対局で「三子であぶなかったことがありましたよ」といったときの表情を思い出すのであった。

本因坊秀哉名人はそれほど強く、また權威、貫禄があったのである。

二

これほど強く、そして權威、貫禄があった「名人」は本因坊秀哉が最後になった。本因坊秀哉名人は「最後の名人」になったのである。

何故かという、江戸時代三百年続いた囲碁の家元制度が、明治維新で大きくゆらぎ、大正十三年には本因坊、井上、安井、林の四家元が合同して日本棋院が創設されたからである。「名人」は、囲碁界では、信長が日海に対して呼んだのが最初だといわれているが、江戸時代になって、制度として「碁所」が設置されると、棋士の実力を示す最高の地位として名人の位が定められた。最初は名人、準名人、上手の地位が定められ、後に四世本因坊道策の時代に段位によって名人が決められた。すなわち、九段即名人、八段準名人、七段上手とされた。名人になるには、官命の場合、協同推薦の場合、争碁に勝った場合の三つに限られた。歴代名人は算砂、道碩、算知、道策、四世因碩、道知、察元、丈和、秀栄、秀哉の十人で、このうち秀栄、秀哉は推薦によるものであった。

明治維新は、廃藩置県に象徴されるように、あらゆる面で制度の改革をもたらしたが、囲碁界で

も、これまで徳川幕府の保護のもとに置かれ、いわば当時唯一のタイトルである「名人碁所」の地位を争って死闘をくりかえしてきた家元制度の根底をゆるがしたのである。大正十三年の日本棋院の創設は、古い家元制度を廃止して、近代的な組織をつくることを意味し、一度「名人」になれば、一代は保証された「名人」の地位にも異変が起こったのであった。

日本棋院の創設とともに、本因坊秀哉名人も初段の若手も一堂に会して「手合い」すなわち、碁を打つことになった。そこで、たとえば本因坊秀哉名人と七段が対局するときにはどういう手合割、ハンディをつけて打つかが大問題となった。

日本棋院が創設されて制度が整うまでは、当時の名人、九段に対して四子が初段とされていた。名人に四子を置いて打てれば、プロの初段の力あり、とされていたのである。

名人、九段に対して四子が初段では、段の差が八段差で四子だから、一段差半子のハンディ、手合割りになる。だが、これでは上手にきつすぎるハンディなので三子差に改められた。実施した結果はこれでも上手が苦しかった。

この問題をめぐって熱心に動いた一人が篠原正美氏だった。議論の中心は、一段差を四分の一にするか、または三分の一にするかだった。一段差を三分の一は上手に不利で、四分の一は下手が不利になる。秀哉名人は一段差、四分の一を主張した。

私は氏から随分この話を聞かされた。氏との対談のときもこの話になると熱が入った。一段差、三分の一では下手に有利で、低段の若手は俄然活気づいた。この手合割に点数制が加わって、昇段

を決めることになった。七十点昇段、五十点陥落という厳しいものだった。

「流石に名人は、第一期の半分は平均点を越されたが、二子、三子置かせた若手とは、疲れが加わったこととおもわれます。大正十三年十月から大正十五年十二月にかけての第四期は若手が当然ながら大活躍、不戦敗がない時代ゆえ、相手が手ごわいと思えば休む棋士が多く出て、半年十八局打ったのは、私のばあいは第一期だけでした」

このときの大手合制度、点数制度は今に至るまで尾をひいている。九段が多くなったのは、ここに端を発している。篠原九段には改革案があったが、なかなか賛同が得られなかったようだ。

こんなに強くて権威のある本因坊秀哉名人が、いよいよ木谷実と引退碁を打つようになったのは昭和十三年のことだった。この引退碁は、名人の権威、坊門の名譽を賭けた勝負碁で大決戦だった。そして、この観戦記を新聞に書いたのが川端康成であり、川端康成が碁の解説を書くためにしばしば訪れたのが呉清源だった。文学の天才児川端康成と囲碁の天才呉清源がここで顔を会わせることになったのである。

私は本稿を執筆途中、奇しくも江崎誠致氏を団長とする日本文化界囲碁代表団の一員に加わって、井上光晴、八匠衆一、笠原淳氏に名譽顧問の呉清源九段と氏の故郷を訪ねる中国の旅をした。氏と旅をして、呉清源九段が私たちと同時代の人であることを実感、同時に本因坊秀哉名人にも親近感を抱いたのであった。私は、呉清源と坂田栄男とが一番強いと信じて育ってきた世代である。私の世代では、碁を打つ人はもちろんだが、碁を打たない人でも呉清源の名前を知らない人はおそ